

# 名 医 の 系 譜 IV

8 ㊦

1991年、川崎医療福祉大は国内初の医療と福祉を一体に人材育成する大学として注目を集めた。京都で開かれた日本医学会総会で「医療をめぐる新しい動き」部門の発言者として登壇。「私たちの大学は医療・健康分野の新しい指導者の育成を目的に、チーム医療の一員として能力を十分発揮できるように国家資格の早期実現、就職の受け入れを切望する」と述べた。全国の医師が集まる大舞台への登場だった。

だが、医療福祉大への取り組みは終わらなかった。95年、保健看護学科、リハビリテーション学科、2000年、医療福祉マネジメント学科、医療福祉環境デザイン学科、07年には臨床工学科を短大から四年制へ移行、米国で学んだ病院経営のできる人材を育成する医療福祉マネジメント学部など5学部17学科に拡充させた。「開学して30年間、時代に合わせ教育体制を整えて

## 創立50周年

川崎学園長 川崎 明德

教職員に囲まれる川崎明德学園長（前列右から2人目）と誠治理事長（前列右）



きた」。学校法人川崎学園の理事長、学園長と立場は変わっても大学の成長にじっくり時間をかけ、心血を注いできた。

「医科大の経営の厳しさ

を教え、鍛えてくれたのは私立医科大学協会の先輩です」

74年私立医科大学協会に入った。医学教育、大病院に巨額の費用が必要な私立医大は経営力が命運を分ける。慈恵医大の樋口一成理事長、同大の名取禮二理事長、懸田克躬順天堂大理事長、浅田敏雄東邦大理事長、吉岡博人東京女子医大理事長ら大物ぞろい。

副理事長でしかも40歳、親子ほど違った。協会長だった樋口理事長にかわいがられ、決算期になると全国の医大と大病院の決算書がそろい損益計算書、貸借対照表を読み比べ、人件費比率、医療経費比率はどうか、どこで利益を生んでいるのか、先輩たちの分析と評価に必死で耳を傾けた。

「良い医大の基礎は財務」と知る。巨額の投資をする医大と病院は将来予測を誤ると取り返しがつかない。2002年、協会長に就任した。68歳だった。「ここで学んだことは多かった」

人生で3回転職があった。外科医として腹部外科を中心に10年間修業、34歳でメスを置いた。副理事長は財団法人、学校法人を含め20年間、理事長24年間。「創立の20年間で副理事長として医科大学経営の裏方で校舎建設と財務を支え、理事長になって新しい大学づくりに懸命に取り組んだ」

だ。働き盛りの54歳でトップになって活躍した。2012年、理事長を長男誠治にバトンタッチし名譽理事長・学園長になった。「気が付けば、今年が創立50周年です」。さりげなく、感慨深い思いを語った。医科大、医療福祉大と二つの大学の開設に関わり学校法人とともに半世紀を歩んできた。

創立者はカリスマ性を發揮し、2代目は組織で仕事をし人を動かした。人望があった。80歳を過ぎ、入って来るのは勲章や賞の話。すべて辞退。と言うより拒否に近い。飾らず、虚心坦懐。あるがままに。名利を求めず、信念を貫く。

（敬称略）  
「おわり」

（阪本文雄が執筆しました）

# 二つの大学とともに歩む